

という点で重要なものである。その他にも、彼が行った地形・地質の調査の方法について、たとえば「距離の測定には、私はいつも量程車を利用した。それが利用できないときには、ストップウォッチを用いるのがよい」とか、「人の往来する道路沿いのステーションの高さは水銀気圧計とアネロイド気圧計を用いて測定した」などと、きわめて具体的なことを書いている。

それはともかく、この論文の末尾には編集者(?)の付記として、「この講演の終了後、万歳三唱の中、国王陛下とゲオルク王子殿下とは、大会議場から退席され、少時の休憩の後、会議が再開された。」と書いてある。つまり、この講演は国王臨席のもとでの“御前講演”であったわけで、ナウマン博士にとっては大変な名誉であったに違いない。

ナウマン博士の講演会に森鷗外が出席した。その御前講演よりしばらく前の3月6日、彼はドレスデンの地学協会において「日本」という講演を行った。その講演会に森鷗外が出席した。すなわち、「独逸日記」の1886年3月6日のところに、

「夜地学協会の招に応じ、其年祭に赴く。此夜の式場演説は日本と云ふ題号にて、其演者はナウマン Edmund Naumann なり。此人久しく日本に在りて、旭日章を佩びて郷に帰りしが、何故にか頗る不平の色あり、今三百人余の男女の聴衆に対して、日本の地勢風俗政治技芸を説く。其間不穩の言少からず……」とある。

これが、鷗外ファンの間では有名なナウマン博士と森鷗外との論争の発端であった。

なお、鷗外が聞いたというナウマン博士の講演は第六回ドイツ地理学者大会である、とこれまで私は思いこんでいた。ところが最近、前筑波大学教授の佐藤正博士と同地球科学系の川田多加美さんの応援によって、それらが別の会であったことが判明した。お二人の御援助に感謝の意を表したい。(以下次回)

---

YAMASHITA Noboru (1991): Visits to Relations and Surrounding Places of Dr. Edmund Naumann I. meissen and Dresden

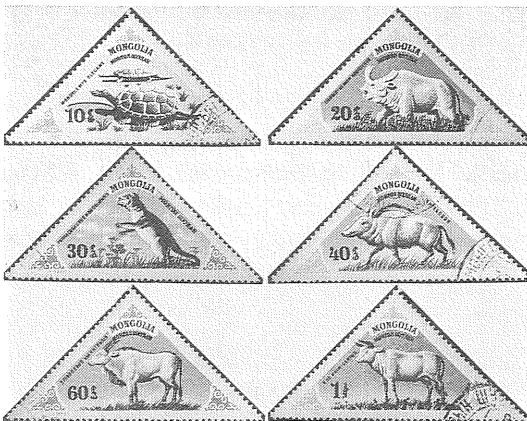
---

<受付: 1991年5月15日>

## 地学と切手

### 蒙古人民共和国の古生物切手

蒙古のゴビ砂漠には、中生代末から新生代にかけての陸成層が分布して、恐龍を初めとする脊椎動物の宝庫である。1919年からのアメリカ自然史博物館のアンドリュースから始めて、1946年からのソ連科学アカデミーの調査(エフレーモフ・ロジジェストヴェンスキー)、1963年からのポーランド・モンゴル共同調査などがよく知られている。モンゴルは1967年にも8種からなる古生物切手を発行し、本誌192号にも紹介されたが、今回のは、7種からなる1977年発行の古生物切手である。80mは省略。



10m *Mongolemys elegans* 初期の陸亀の一種。

20m *Enbolotherium ergilierse* 雷獣類進化の頂点として蒙古に産するもの。最初はオスボーンがE. andrewsiと命名。漸新統に産し、体長4mを越し、鼻上の一对の角は基部でくっついてヘラ状となっている。

30m *Psittacosaurus mongoliens* 恐龍の鳥盤目の進化の最終段階として、かものはし恐龍と並ぶもの、体長約1.5mで、クチバシの様な鼻孔部を備えた小型の恐龍だった。白亜紀後期。

40m *Entelodon* 絶滅した偶蹄類エンテロドン類に属し、漸新統から産し、ヨーロッパに多い。頭骨は長く1m以上に達し、臼歯のすり減り方から、左右方向にそしゃく運動をしていた。

60m *Spirocerus kiakhtensis* 鮮新世—更新世にかけて主にアジアに住んだ。偶蹄目 ウシ上科、アンティロカブラ科の一員で、かもしかの仲間。

80m *Hipparion* ウマの一属、中期中新世に北米で出現し、ベーリング海を通してアジアに渡った。アフリカでは更新世まで続いたが、鮮新世で絶滅。

1t *Bos primigenius* 更新世及びそれ以後に生息した巨大なウシで、1627に絶滅したばかり。旧石器人の狩の対象だった。(P. Q.)